

論文内容要旨

※整理番号	33	(ふりがな) 氏名	はやし しずこ 林 静子
修士論文題目	副交感神経活動値と気分状態・不安の関係性 —POMS・STAI を用いて—		
<p>研究の目的：健常者の複数日の 24 時間ホルター心電図データから心拍変動粗視化スペクトル解析により得られる副交感神経活動値と POMS・STAI の気分状態・不安の得点の相関関係を明らかにする。</p> <p>方法：研究の趣旨を理解し協力が得られた健常者 12 名を対象に、複数日間調査を行った。心拍変動粗視化スペクトル解析で副交感神経活動値を算出し、これを積分し、24 時間、活動期、睡眠期、POMS・STAI 記入前 1・3・6・9 時間の累積副交感神経活動値を求める。気分状態・不安は POMS・STAI の得点を指標とし、被験者毎の累積副交感神経活動値と POMS・STAI の各項目得点の関係を単相関分析し 5% の水準をもって統計的に有意とした。</p> <p>結果：1) 24 時間累積副交感神経活動値と一定した相関を示す傾向は見られないが、調査日による差があるものは、POMS の D：抑うつ - 落込み、C：混乱の項目との間に有意な負の相関を示す傾向にある。</p> <p>2) 調査日による睡眠期累積副交感神経活動値に差が見られるものが、POMS の T-A：緊張 - 抑うつ、A-H：怒り - 敵意、F：疲労項目との間に負の相関を示す傾向にある。</p> <p>3) STAI 記入時間前 1 時間の累積副交感神経活動値と STAI の X-1：状態不安が有意な負の相関を示し記入時間前 9 時間とは STAI の X-2：特性不安の項目と有意な負の相関を示している。</p> <p>考察：1) 24 時間累積副交感神経活動値との関係で相関を示す傾向が一定していない事は、個人によって刺激による反応が違うことが考えられる。又、調査日より差がみられ生活に変化があると考えられる場合気分状態との有意な相関が見られるのは、活動 - 休息バランスが取れていることを示しているのではないかと考えられる。</p> <p>2) 睡眠前の気分状態と睡眠期の累積副交感神経活動値に相関を示す傾向が見られており、睡眠前の気分状態が睡眠に影響を及ぼしている可能性がある。</p> <p>3) STAI と累積副交感神経活動値との相関が X-1 では短時間で見られ、X-2 では比較的長時間と相関が強くみられるため、累積副交感神経活動値の観察により不安に対する介入の効果を短時間と長時間で評価していく事ができるの可能性があるとし唆される。</p> <p>総括：副交感神経活動と気分状態・不安の相関関係を明らかにするために、健常者 12 名を対象に心拍変動粗視化スペクトル解析から累積副交感神経値を算出し、POMS・STAI との関係性について検討を行った。結果、刺激による個人の反応の違い、24 時間累積副交感神経活動値の変化が対象者の生活リズムを示す傾向、睡眠前の気分状態と睡眠期累積副交感神経活動値の関係性、STAI の項目との関係性を示す傾向が示唆される。</p>			

備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。